

挨拶

梅原 猛

本日は、国際日本文化研究センター主催の第二回の国際研究集会の冒頭の基調講演会においでいただきましてありがとうございます。

実は、昨年モレヴィストロース先生を招いて講演会を開いたわけですが、私どもの予想をはるかに上回って、七〇〇以上九〇〇人ぐらいお見えになりました、同時通訳のレシーバーが全部に行き届かなくて大変ご迷惑をかけましたけれども、ことしもまた昨年以上にたくさんお出でいただきました。これはケネディ先生及び高坂先生の高名のお陰でございますが、当センターとしても大変うれしゅうございます。あつくお礼申し上げます。

昨年は、私のあいさつのかわりに桑原武夫先生がごあいさつをしてくださったのです。私どもは単なるあいさつと思っていたのですが、桑原先生は、短い時間でございましたけれども、自分の共同研究にかける情熱と、日本とフランスの文化の違いというものについて、実にみごとな講演をされました。私どもは大変感動して聞いたわけでございますが、それが終わりまして、先生はお風邪で入院されました、とうとう不帰の人になったわけでございます。

このセンターの設立につきまして、先生には大変ご尽力いただきました。先生がおられませんでしたらこのセンターはできなかったと思うのですけれども、先生は最後まで責任を全うされまして、このセンターのために殉職されたような気さえするのです。私は先生の

ことを考えると胸がかきむしられるような思いでございますが、深くご冥福を祈りたいと思います。

さて、本日の講演会でございますが、講師の紹介に先立ちまして、少しセンターについてお話をしておきます。

このセンターは、正式に言えば国際日本文化研究センターでございます。民博や歴博と同じように国立大学共同利用機関、ことしの四月からは大学共同利用機関ということになります。京都で初めての大学共同利用機関でございます。

センターは一体何をするかということですが、桑原先生が一生懸命になりましたように、一面これは京都大学人文科学研究所の仕事を受け継ぐわけでございます。戦後の京都大学人文科学研究所は、その共同研究に非常に目覚ましい成果をあげたことは、皆さん、よくご存じでございます。学問というものはだんだん専門化していく。専門化して精緻になっていく。それが学問の必然の方向でございますが、それだけではいけない、専門化すればするほど逆に総合的な研究が必要になってくる。そういう総合的な研究の機関といたしまして、戦後の京都大学人文科学研究所の役割りは、どんなに強調しても強調しすぎることはないと思うのでございます。そういうえば共同研究の幾つかの成果があります。桑原先生を中心とする共同研究、塚本善隆先生を中心とする共同研究、今西錦司先生を中心とする共同研究。それぞれ個性は違っておりますが、すざまじい、すばらしい成果をあげたわけでございます。そのような共同研究をする機関が私のところでございますが、対象を日本にしば

って、そしてそれを国際的な形です。世界の人に集まってもらってここで日本のことを研究する。そういう機関でございます。

なぜ、今、そういうものが必要になってきたか。それは世界における日本研究が発達したからです。考えられないような大勢の世界の人が日本のことを研究しています。十年前と比べると十倍、あるいは一〇〇倍になる。今、世界には多くの日本研究者が育ちつつあります。その人たちは交流する機関がない。今まで日本はそういう機関をつくらなかった。これはサボってたとしかいえない。そういう世界の人と交流して共同研究する機関が私のところのセンターでございます。

そればかりではなくて、まだ解決できない問題がたくさんある。世界の人は日本のことを知っていたがっているけれども、しかし、日本の学問は専門化して、部分において正確になるけれども、大きな問題についてまだ解決できない問題がいっぱいある。それを皆で研究しあおうというのが我がセンターの任務でございます。

これと同時にもう一つ、研究協力ということがございまして、世界の日本研究者に対する研究を協力するというところでございます。そのためにはまず情報をつくる。世界の日本語以外で書かれた日本研究の論文を全部集めよう。そして、日本研究についてはできるだけ正確な情報を提供しよう。新しいコンピュータを使って、そして日本研究について正確な情報を提供しよう。世界の日本学者から、こういうことについての研究はどういうふうに行われているんだという問い合わせがあった場合に、すぐ答えを出そうと。そういう情

報施設を、今、つくろうとしているわけでございます。これはなかなか容易ではない。十年、二十年かかることでございますけれども、私どもはあえてこれは必要である、日本のためにも世界のためにも必要だと思って、鋭意そういう情報施設をつくることに努力しているわけでございます。

こういうわけでございまして、我が機関は国際的、学際的な日本研究の共同研究の機関でございます。それと同時に研究協力の機関でございます。どうか世界の皆さん、私どもセンターについていろいろご利用をいただきたい。そして、できるだけ厳しいご注文をいただきたい。私どもはできる限りの努力はしていきたいと思っております。

幸い文部省の理解を得まして、ことし三月からいよいよ建物ができまして、平成二年、来年度には最小限の建物が建ちまして、我々は移転。そして平成四年には完成ということになるわけでございます。場所は京都の西の桂坂というところでございまして、平成四年にはできるということでございます。

そういうわけでございまして、当センターは完成に向かっていろいろ努力しているわけですが、そのセンターの事業として国際研究集会が重要な行事でございます。その行事を飾る冒頭の公開講演に、昨年はレヴィストロース先生を迎えました。これは大変みごとな講演でございました。レヴィストロースさんの五十年にわたる学問の情熱がみなぎった、大変みごとな講演でございました。多少日本をほめすぎた感じがしないではないですけども、まあ私どもが日本

をはめるよりはずっとよろしゅうございます。大変すばらしい講演でございまして、『中央公論』にも載りまして、そして評判もよかったです。ございまして。こしはかわりましてポール・ケネディ先生。

『大国の興亡』という本を書かれて大変有名なポール・ケネディ先生でございまして。

一言、これは弁解をしておきたいのですが、昨年、レヴィストロース先生を迎えまして講演が大成功でございまして、こしとはだれを迎えようかというのでいろいろ相談をしたのですけれども、ある助教授が、ポール・ケネディという人がいいようだ。大変大胆な仮説を立てると。ちょうど所長好みのすごい仮説だと。所長も顔負けするような仮説だと。そういう人がよからうというんですね。もちろん『大国の興亡』を読みまして、私に提案をしたわけでございまして。そのころはポール・ケネディはまだあんまり知られなかった。知る人ぞ知るという段階でございまして、翻訳が出てなかったわけでございますが、以後翻訳が生まれて、日本でもたちどころにベストセラーになった。センターはいつもベストセラー作家ばかり呼ぶじゃないかという誤解があるかと思いますが、これはそうではないのでございまして、ベストセラー以前に我々は既にケネディさんをお願いしたわけでございまして。これは我がセンターの先見の明でございまして。そのケネディさんにお話をいただくわけですが、昨年のレヴィストロース先生は八十歳です。ポール・ケネディさんは四三歳です。すごく若いんです。私より二十歳も若い。私の子供ぐらの年齢でございまして、こういう若い先生が『大国の興亡』という

すばらしい本を書くことは我々にとって驚きでございまして。

このケネディさんに対して、日本側としては高坂正堯先生を迎えたわけでございまして。我がセンターは大学共同利用機関でございまして、センターの人もありますけれども、いろんな大学の学者を迎えて共同研究をするという機関でございまして、この公開講演も京都大学の高坂先生にケネディさんと一緒に講演していただくことになったのです。これはまさに東西の横綱——ちょうど今お相撲をやっておりますけれども、千代の富士と大乃国というような、だれが千代の富士か大乃国かでございまして、私は大変大変すばらしいものだと思っております。

高坂先生は、私は先生の高校時代から知っておりますけれども、私の友人の源了圓さんというのが高坂先生の家庭教師をしてまして、高坂というのが今度京大を受けるんだという、そんな話でございまして、京大に通るのは間違いない、一番で通るかどうかが問題だということでございますから、若いときから大変な秀才でございまして、たくさん本を出しておられますが、『現実主義者の平和論』とか『宰相吉田茂論』とか、日本を代表する政治学者であると思えます。タイガースの応援団長としても大変有名でございまして、野球が始まりますのでお忙しきはないだろうかといったら、こしはタイガースは大した期待はしませんから大丈夫でございましてという話になったわけでございまして。

最後のディスカッションは確かに大変期待すべきであります、このディスカッションの司会者をうちのセンターの村上泰亮先生に

お願いするということでございます。村上先生は皆さんよくご存じでございますけれども、現代まれに見る深い思想性を持った経済学者であると思います。東京大学をやめまして、一九八八年の十月から当センターに来てもらっているわけでございます。

多少当センターの宣伝をいたしますと、当センターは、東京大学や筑波大学やいろいろなところから人材をいただいております。そういうわけでございまして、やはり共同研究には優れた独創的な学者が要るわけです。それがリーダーをして初めて優れた共同研究ができるということでございまして、いろいろな大学から人を引き抜いて梅原はけしからんという評判があるらしいのでございますけれども、これも日本の学問のためにやっているわけでございます。

さて、ケネディさんのことでございますが、私はケネディさんの『大国の興亡』という本を読みまして、こんなことを考えました。

多分これは見当違いの批評かもしれませんが、ケネディさんの一つの思想の中心は文明の史観。これはやはりイギリスの先輩であるトインビーの影響を十分受けていると思います。私の見方によれば、それはニーチェから始まりまして、ニーチェ、シュペングラ、それからトインビーという路線でございますが、そういう文明の生き死に——文明というものは必ず興隆し、また衰える。日本でいえば「祇園精舎の鐘の音、盛者必衰の理をあらわす」というような歴史の興亡ということが一つの主題である。それはトインビーやシュペングラの流れをくむものだと私は思うわけでございます。

ただそれだけではない。もう一つ大事な点があると思うんです。

それはいかにもイギリス人だと思えますけれども、イギリスの経験論。いつも事実に基づいて議論をしようと。その事実への粘り強い分析というものは、私はイギリスの知性の伝統だと思うのです。シュペングラやトインビーのように、ただ文明というものを宗教とか思想を中心に考えるのじゃなくして、経済と政治というものを中心に置いている。だんだん経済が発展しますと、その強い経済力を守る軍事力が必要だと。そうしますと軍事力が巨大になって、逆に経済力を圧迫する。そして大国は生成と消滅を繰り返していく。そういう経済力と軍事力のアンバランスというところが歴史観の基本にあるのではないかと私は思いますが、それはどこかでマルクスの臭いがいたします。マルクスとトインビーを総合することとはだれも考えないことでございますけれども、独創的な思想家というものは一見思いがけない二つの学説をより合わせて、そして独創的な仮説をつくるというところにあるのではないかと思います。それは間違った批評かもしれませんが、私は、ケネディさんの学説に、トインビーと同時にマルクスの影を見るわけでございます。

私どもはケネディさんから一体何を学ぶべきかということでございますが、これは後から高坂先生のお話に詳しく説明されると思いますが、大国は一見滅亡の危険をもっている。この大国というのはアメリカであり、ソ連である。そうしましたら次は日本の時代がくるという受け取り方があると思いますが、これは間違いであろうと思います。そんなに簡単にいかないことは、きょう、きっとケネディさんからのお話もありますし、高坂さんからのお話もあると思い

ますけれども、そういう日本人の自尊心をくすぐるような結論は、日本人としてやすやすと飛びつくべきではないと私は思います。

とすれば一体何を学ぶべきか。私ははっきりいいますが、ケネディさんの巨大な仮説形成の力。これは一つの仮説だと思いますが、近代思想の流れを大国の興亡という形で説明する、これは実に巨大な仮説である。ある意味でいうとトインビーさんよりもっと大きなかもしれない。そういう仮説形成が学問では実に大事なのでございます。

この仮説形成については、日本人はまだ十分ではないと私は思います。これはどういうわけかちょっとわかりませんが、多分一神教というものが大きく働いているんじゃないか。神様を信じて、神様は自分の真理がわかっている。真理は神様と自分が知っているという信念があればいかなる批判にも耐えられる。こういうのがヨーロッパの人たちの心の中にはあるのではないかと思うんです。たとえばキリスト教を信じなくなっても、そういう真理への信仰というものを持ち続けている。これはすばらしいことでございまして、日本人は残念ながらそういう真理への勇氣というものを甚だ欠いている。一つの仮説形成の力に耐えない。それは孤独になれないということなんでございます。新しい仮説をつくるには本当に孤独にならないといけない。自分一人で聞えるという自信がなかったならば、新しい仮説はつくれないと思います。

そういう意味でございまして、日本は経済的に発展しましたけれども、そして自然科学はすばらしい先生方が出てきているのですが、

日本が一番弱いのは人文科学、社会科学、それから芸術だと思っています。人文科学、社会科学、芸術でもっと大胆な創造的な仕事をしないとイケないと思います。それは仮説形成の力だと思いますが、私はそういうことをケネディさんから学ぶべきではないかと思うんです。先生はまだ四十三歳です。そしてこんな巨大な仮説をつくったということに、私は満腔の敬意を捧げたいと思うのでございます。

いろいろ批判もあるらしいのですが、その批判も耐えている。ケネディさんは馬拉ソンをして身体を鍛えて、その批判に耐えているという話でございませうけれども、頑張っていただいたいと思います。

もう一つでございませうが、これがアメリカでベストセラーになるということとは、やはりアメリカの力を示しているということでございます。それは自分に不利益な学説でも、それが真理であるならば喜んで聞こう。これは強い知性への自信だと思っています。日本で日本で衰亡するというような本を出したときに、そんなベストセラーになれるかというと、私は大変疑問に思っています。ということは、自分の力を、自分の現状をいつも冷静に眺める目を持っている。この眺める目を持っているということはアメリカの力である、アメリカの強みであると思うのでございます。

今の日本人にとって一番大事なことは、卑屈にならずに傲慢にならずに生きる。これが一番大事なことだと思うんです。日本の歴史を考えると、卑屈と傲慢を交互に繰り返してきている。そういう歴史があると思いますが、自分には自分の自信を持って、そして謙虚に生きることが一番大事なように思っています。ケネディさんから学

ぶべき第二のことは、そしてこの本がアメリカでベストセラーにな
っているというのを学ぶということは、自分についての、自国につ
いての厳しい見方をいつもしている、それが知性の証拠であると思
うでございます。

それではこれからいよいよケネディさんと高坂さんの講演をお聞
きしたいと思います。

きょうはどうもありがとうございました。